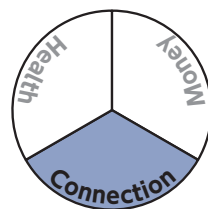


キャリア理論から「〇〇ガチャ問題」を考える



総合調査部 副主任研究員 高宮 咲妃(たかみや さき)

「〇〇ガチャ」の流行

2021年に「親ガチャ」が流行語大賞にノミネートされたことは記憶に新しいと思います。その派生で最近では、職場での不運を嘆き、「上司ガチャ」「配属ガチャ」「同期ガチャ」といった言葉も出てきています。「〇〇ガチャ」というのは、まるでカプセルトイでランダムに出てくるアイテムのように自分で選べず当たりはずれがあることを表現した言葉です。これらに共通するのは「運は選べない」という諦めの姿勢であり、「ガチャの結果」に失敗感を感じてしまうと、仕事へのモチベーションが低下し、会社に行く気力すらなくなってしまうという状態に陥りかねません。

「運」の文脈でよく引用される話として、松下幸之助氏が採用面接の最後に「あなたは運がいいですか?」と聞き、「運が悪い」と答えた人を全員不採用にしたという話があります。「運」とは「運ぶ」という文字通り、たとえ(客観的にみると)運が悪いことが起こったとしても、自分の考え方や行動次第で自らの人生を良い方向に切り拓けるものと言われています。松下氏はまさに「自分は運が良いと言い切れる=どんな出来事も自分の力で良い方向に変化させることができる」人を求めていたということです。

「適材適所」のキャリア理論は古い?

従来のキャリアの考え方は、マッチング理論、つまり、個人の持つスキルや能力(=特性)と、それぞれの仕事が必要とするスキルや能力(=因子)をマッチングさせることが、よい職業選択であるという考え方をベースにしています。簡単にいうと職業選択には適材適所が重要であり、「未決定(=ぴったりの職業が見つからず、キャリアが定まらない状態)」を減らすことを目指すものでした。

しかし、この適材適所を重視しすぎると、特に変化の激しいVUCAの時代で、職業自体が変化し続ける事実や様々な特性を持つ人が同じ職業で活躍できている状況等を無視することになり、疑問視されるようになりました。

計画的偶発性理論(Planned Happenstance Theory)

従来は明確なキャリアの目標設定とその達成計画が重視されてきましたが、実際は自身のキャリアが綿密な計画のみによって形成されることはほぼありません。キャリア計画やゴールを作成・設定することは良いことですが、そこに正確さや正解を求めてしまうと、却って自身のキャリアに制約や壁を作りかねません。そのようななかで注目されている理論が「計画的偶発性理論」です。簡単にいうと、個人のキャリアの8割は予想しない偶発的な出来事によって決定されるため、その出来事の影響を軽視せず、積極的に取組みキャリア形成に活かすべきという考え方です。偶然の出来事をキャリアの好機につなげるためには、「好奇心」「楽観性」等の5つのスキルが重要とされています(資料)。予期せぬ偶然の出来事が自身の望ましいキャリアビジョンにつながったとき、その偶然はあたかも自分と出会うために計画されていたもののように思える、ということから「計画的偶発性」といわれています。

キャリア人生は、ある意味ガチャの連続です。一見マイナスと思える「予期せぬ出来事」も起こりえるでしょう。それを自身のキャリアの好機にすることで「後で『よかった』と思えるキャリア人生」を歩むことができるのではないのでしょうか。

資料 「計画的偶発性理論」における偶然の出来事を好機につなげるための5つのスキル

好奇心 Curiosity	新しい学びの機会を模索する
持続性 Persistence	たとえ失敗しても努力し続ける
柔軟性 Flexibility	姿勢や状況を変えることを進んで取り入れる
楽観性 Optimism	新しい機会の実行でき達成できるものとする
冒険心 Risk-taking	結果がどうなるかわからない場合でも行動することを恐れない

(出所) 独立行政法人労働政策研究・研修機構「職業相談場面におけるキャリア理論及びカウンセリング理論の活用・普及に関する文献調査」より第一生命経済研究所作成